Appendix 1

組み込み型高速画像処理システム開発プラットホームを BeagleBone + FPGA基板で構成

BeagleBoneの外部バスに FPGAをつないで機能アップ!

江崎 雅康,寺西 修 Masayasu Esaki, Osamu Teranishi

画像位置決め装置、画像検査装置など組み込み型画像処理システムでは、画像通信、判定処理、タイミング制御、処理シーケンス制御などプロセッサに向いた処理と、並列処理、パイプライン処理などFPGAに向いた処理が求められます。ここではARM Cortex-A8を搭載した市販のLinuxカード・コンピュータBeagleBoneと、独自に開発したFPGAボード基板で構成する組み込み型画像処理システム開発プラットホームを紹介します。

● 産業用画像処理システムの構成

産業用画像処理システムの構成としては大きく分けて,

- FPGAとマイクロプロセッサによる組み込み型システム
- Windowsパソコン上の画像処理ソフトウェアによるPC型システム

の2方式があります.

組み込み型画像処理システムはハードウェア開発が必要ですが、その開発に要するコストと時間が大きな課題になっています。標準的な画像プラットホームを使って開発の第1段階をスタートさせることにより、コストを抑えて効率良く開発を進めることができます。

ここで紹介する画像処理システム開発プラットホームは、このような意図に基づいて開発したもので、高機能モデル開発に必要な要素技術を検証することができます。LinuxボードとしてBeagleBoneを使い、Xilinx社製Spartan-6搭載FPGAボードの上に重ね合

表1 BeagleBoneの仕様

項目		仕 様
C P U	CPUコア	AM3359 (ARM Cortex-A8)
	クロック	最大 720MHz
	L1キャッシュ(バイト)	コード:32K, データ:32K
	L1キャッシュ(バイト)	256K
	ROM (バイト)	176K
	RAM (バイト)	64K
メモリ (バイト)		256M DDR2 SDRAM 400MHz
電源		USBバス・パワー,外部5V
周辺ペリフェラル	Ethenet	10MHz/100MHz, RJ45
	SD/MMCコネクタ	マイクロSDカード
	USBホスト	ハイスピード USB 2.0
	USBターゲット	ハイスピード USB 2.0
	拡張コネクタ	46 ピン×2列
基板重量		39.68g
基板サイズ		86.36mm × 53.34mm, 6層

わせて開発プラットホームを構成しました. 両基板の インターフェースはBeagleBoneの拡張バス・コネク タ (46 ピン×2) を介して行います.

同種類のローコストLinuxボードとしてRaspberry PiやPandaBoard, BeagleBoardなどが市販されていますが、外部バス・コネクタを備えていないボードでは、FPGAとバス接続して画像フレーム・メモリのビクセル・データを高速にアクセスすることはできません.

BeagleBone を採用した一番大きな理由はここにあります。BeagleBone は回路図がOrCADのデータで公開されているので、将来的に独自ハードウェア開発を行う場合のプロトタイピングにも適しています。

■ ローコストLinuxボードBeagleBone

表1にBeagleBoneの仕様を示します。画像処理システムでは、搭載されているマイコンの処理速度も重要です。BeagleBoneの720MHzのクロック周波数は、画像処理速度を大幅に改善することができます。

写真1 (a) にBeagleBoneの部品面を、写真1 (b) にBeagleBoneのはんだ面を示します。カード・サイズの6層基板の両面に、プロセッサAM3359、DDR2 SDRAM、電源マネージメントIC、Ethernet、USB (ホスト/ターゲット)、マイクロSDコネクタが所狭しと実装されています。

基板両サイドに配置されたP8, P9プラグは外部拡張用のコネクタです. 部品面に実装されているので、この拡張コネクタへ拡張基板を接続する場合は、工夫が必要です.

通常のヘッダ・コネクタで接続しようとすると、基板上部のEthernetコネクタRJ45と接触してうまく接続できません。長ピン型のヘッダ・ピンを使うか、拡張基板のエッジをRJ45の側面ギリギリに設計する必要があります。

BeagleBone は組み込み制御に必要な,

- GPIO
- UART